
Lucifer Crow

スーパーじじいX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Lucifer Crow

【Nコード】

N6353T

【作者名】

スーパージジイX

【あらすじ】

少年アビスは、ドルンの村に住む、ごく普通のハンターだった。村で手続きを受け、モンスターを狩る生活が普通だったその日常に変化が訪れる。狩猟の裏側で秘密に実行された謎の組織の暗躍が、後にアビス達との邂逅を生みつける。戦うしかないのだろうか？生き延びる為には、戦うしかないのだろうか？まるで見計らっていたかのように、組織と対立する管理局とも出会い、遂には組織に属していた少女とも出会う。戦いは悲しみと破壊しか生み出さないが、それでも彼らは戦わなければいけないのだ。例えば街を1つ破壊

されようと、デミヒューマンが襲ってこようと、異星人に目を付けられようと、一歩も引き下がる事は出来ない。

このストーリーは自身で管理してるブログ、『夏目漱石の逆襲』で個人執筆してる作品をこちらに投稿させて頂いてる作品であります。

また、今後投稿される作品の中には、度の強い暴力表現や性表現、及び精神的に辛い表現が出てくる場合があります。その時はその章ごとに警告させて頂きますので、どうか宜しくお願い致します。

序章 闇の嵐（前書き）

アビスがハンターになる数年前……ドルンの村付近の砦で鋼風龍と討伐隊の激戦が繰り広げられた……。

序章 闇の嵐

「撃て！ 奴に攻撃のチャンスを与えるな！」

周囲は全てが闇で支配されている。そう、今は時間は夜であるが、もう1つ、注目すべき点があるのだ。

地面を激しく叩きつけるその豪雨は、その地にいる者達の耳へと鮮明に届いていく。

今放たれた男性の力強い声は、古びた砦に配属されているボウガン装備の討伐兵達の隊長である。

内部で火薬を使い、銃口から大型の弾丸を発射させる極めて殺傷能力の高い武器を、兵達は使っている。

その発砲されている相手とは……

その相手は【鋼風龍】^{「くわふうりゅう」}である。

古龍と呼ばれる科学的にもまだ解明されていない飛竜にして、戦闘能力も極めて高い危険視されている存在だ。

黒い甲殻、4本のやや細身な四肢、四肢の間に位置する黒い翼、黒い身体の中に混じった色を思わせる青い両眼。

そして、その甲殻は鋼の造りとなっているから、打たれる雨によつて艶つやすらも見えている。

低空飛行で飛び回り、目の前にいる敵対者、即ち兵士達に対し、脅威を見せ付ける。

——口から、風の弾丸を吐き出す……——

高密度に圧縮された空気が砦に向かって飛ばされる。

たかが空気と言って侮る事は出来ない。着弾時に激しく破裂し、周辺を激しく巻き込むのだから。

戦いの為に送り付けられた空気弾が、数名の兵士を吹き飛ばす。

鋼風龍の攻撃にも怯む事無く、何十人も配属されている兵士達はボウガンで必死の抵抗を続けている。

手を止めてはいけない。確実に、目の前の悪魔を倒さなければいけないのだ。

しかし、相手は古龍と呼ばれる未知の領域だ。

まだ科学的な解明はされていないものの、周囲に風を纏わり付かせ、外から飛んでくる投擲物とうてきぶつを全て弾き飛ばす。

接近すら許さないその古龍は、遠距離からの攻撃すらも拒絶してしまふ。

無数のボウガンから発射される弾丸も、その殆どは鋼の甲殻に辿り着く前に弾き飛ばされてしまふ。

運良く辿り着いた弾丸であっても、致命傷を負わせる事は出来なかった。

ただ、痛みすら覚えない程度の掠り傷を負わせる程度だ。

事実として、兵士達は人数以外では、とても鋼風龍こふうりゅうに勝まさっているとは言えない状況だ。

『ニンゲンメ……ソノテイドカ……』

初めてここで黒い龍が口を動かしたのだ。

非常に低く、そして野太く、それでも人間にはしっかりと聞き取れる声を放ったのだ。

当然、通常ならば古龍であろうが、飛竜であろうが人語を扱う事はありえない。

まるで言い捨てるような言葉を放った後、龍はその鋼の翼を力強く羽ばたかせ、風が何枚も重なったような風波を巻き上げる。

「ぐああ……！」

「うわあ……！」

その風の力を見縊る事は出来ず、被害者となった兵士達はまるで風に投げ飛ばされるかのように、皆から距離を取らされてしまう。

それは、実際に投げ飛ばされてしまったと表現しても正しいだろう。兵士はそれだけでもう負傷してしまっているのだから。

風を操る古龍によって、皆に配属された兵士達は徐々に数を減らしていく。

周囲に映り始めるのは、破損したボウガンの破片や、兵士達の死体と血であつた。

しかし、生き残っている兵士達は誰一人として諦める事は無かつた。ボウガンを必死に扱い、銃弾を発射させ、古龍に傷ぐらひはつけていく。

だが、それで喜んでいるのは早すぎるだろう。まだ、決定打を一度も与えていないのだから。

それに伴い、鋼風龍が立ち去る様子は一向に見えない。きつと、まだ足りないだろう。何かが。

甲殻に付いている傷は、所詮は傷である。痛みも感じなければ、動きを鈍らせる為の要素にすらならないのだから、これはほぼ無意味な傷に等しい。

——とうとう、鋼風龍は1つの選択肢を取った……——

『コレデサイゴダ……』

もう満足を感じたからか、そして、最期の最期に究極の贈り物でも差し出そうと考えたのだろうか。

鋼風龍は雨の激しく降る空間で大きく舞い上がり、砦の真上へと陣取った。

鋼の刺々しい口元に、風の力を溜め込む。

終に、発動された……

アルディメットストリーム

——【終極への案内者】——

口内から噴き荒らされる放射風は、砦の真上から激しく突き刺さる。高密度に圧縮された凶器なる風が、砦を叩き割り、内側から破裂させ、残された兵士達を軽々と黙らせる。

砦すらをも砕いていく風であれば、人間なんか一溜りも無いのが現実なのだ。

そうである。

命を落としてしまった兵士達が、ここに来てまた一気に数を減らす事となったのだ。

しかし、残っている者なんて、いるのだろうか？

目の前の現状を確認した鋼風龍は、ようやく自分を狙う敵対者、即ちボウガンを装備した兵士達を殲滅したと意識する。

もうこの夜の嵐の空間にいる理由は無くなった。
風で自分を護る理由も無くなった。

風の護衛膜を解除すると同時に、どういう訳か、嵐もピタリと止んでしまう。

まさか、あの大嵐もこの龍が操作していたのだろうか。

『シヨセンニンゲンハコノテイドモノナノカ……』

まるで失望でも覚えたかのように、皆に背中を向けてそのまま飛び立とうと、翼を羽ばたかせる。

しかし、それがこの龍にとって、ミスとなった。

「貴様に……勝手な真似は……させん……」

皆を大破された際、全員が命を落としたはずだというのに、たった1人だけが生き残っていたらしい。

その1人は、最後の力を振り絞るかのように、近くにあった自分の愛用のボウガンを握り、1つの弾を発射させる。

発射された弾は、鋼風龍の背中に鋭く突き刺さる。

違和感を覚えた鋼風龍自身も、流石にそれに対しては反応を見せる。

『ナンダ……？』

単に違和感を覚える程度では終わらなかった。

―ドォォン!!

小規模ではあったものの、背中全体を包み込むには十分な爆風が巻き上がる。

そして、爆風により、古龍の身体は前方へ押し出される。

『グオツ!!』

自分に走ったその衝撃に、驚きと戸惑いを露にする。

その撃たれた弾丸は、着弾した際に弾自体が爆発する仕組みになっていたらしい。

本来ならば、そして上手く行けばそのまま体内へと侵入させ、体内爆破でもさせていたのかもしれない。

しかし、強靱な鋼の甲殻の前に、それは防がれてしまった。

だが、これがある意味で鋼風龍に対する決定打となったのだろう。

「済まない……アビ……ス……俺は……もう……」

この時点ではもうこの男、隊長であるが、もう虫の息だったらしい家で待っているであろう弟の名前を呟きながら、濡れた地面の上に上体を落とす。

そう、これは永遠の眠りについてしまった事を意味していた。

『マダタカウチカラガノコッテイタトハナ……』

対照的に、鋼風龍は背中に傷を負った程度であり、命には別状は無かった。

背後を振り向きながら、弾丸を発射した誰かを眼だけを動かして探してみるが、もう全員が横たわり、死に絶えていた。

再び、前に向き直った。

『マアイイ……コンカイハコレクライニシテオイテヤロウ……』

やがて、鋼風龍は背中に傷跡を残したまま、この大地から飛び去っていく。

きつと夜明けが近かったのだろうか、地平線の彼方から、太陽がゆっくりと姿を出し始めた。

しかし、光が映し出すのは、死体に埋め尽くされた残酷な大地だったのだ。

新しい朝が始まる瞬間、あまりにも凄惨過ぎる光景が鮮明となった。

その後、鋼風龍の行方を知る者は、誰もいない……

序章 闇の嵐（後書き）

始めまして、今回初めて投稿させて頂く事になった、スーパージ
じいXと申します。今回作家としての実力を養いたくて、ここで活
動させて頂く事に致しました。

これから宜しくお願い致します。

第2章 英雄の弟（前書き）

あの鋼風龍の事件から約3年後、決定打を与えた隊長の弟、アビスはもう立派なハンターとしてこの世界を歩んでいた。

第2章 英雄の弟

ここはドルンの村と呼ばれる、1人の竜人族の若者が築いた村である。発展途中である為、民家の造りもやや質素であり、木造きうくりであるのが大きく目立っている。

それでも、ハンターが生活をする村なのだから、竜人族が技術を輝かせる工房も設置されているし、雑貨店も建設されている。ハンターとして生きていくのに最低限必要な要素は揃っている村である。

数名のハンターが住居を持って生活しており、その中には数年前に鋼風龍こうふうりゅうと戦い、そして命を落とした討伐兵の隊長の弟であるアビスの姿もあった。

紫色のやや丸みを帯びた髪に、まだ未熟な色を見せてくれる茶色の瞳を持った少年であり、今は皮と鉄で主要箇所を保護した防具を纏いながら、狩場から帰ってきた最中であつた。背中には、片手で扱える剣と盾、それらを纏めて サーパーブレイド と呼ばれる青い色を持った武器を背負っていた。

手押し車には、狩場で手に入れたかと思われる、桃色の鱗や甲殻が詰まれている。その他、キノコ等の菌類や、草や花等の植物類も

色々と詰まっていた。

「ただいま村長！ あの怪鳥っていう奴倒して来たよ！」

アビスは、手押し車の取っ手部分を抜け、入り口の前で待つてくれている村長の元へと走り寄った。

白いタンクトップを纏い、そしてやや小柄な身長と、やや大きな鼻が特徴的なその村長が狩猟から戻ってきた少年に向かって笑顔で返答をした。

「アビスか。君だったら、あれくらいの怪鳥は討伐出来ると信じてたよ」

戻ってきてくれた同じ村に住む人間に向かって、村長は再び笑顔を見せてあげた。

怪鳥とは、鳥竜の一種であり、恐らくは殆どのハンター達が最も最初に戦う大型の竜である。

他の飛竜と比較すれば、小柄である上、力も弱いものの、それでもハンター暦の短い者であれば姿をただで怖気付いてしまうのは確実だ。その登竜門とも称される鳥竜を倒してこそ、ようやくハンターとしての実力を僅かではあるが、認められる事となる。

きつと今まではもっと下級クラスであったモンスターを狩猟して

いたアビスではあるが、今回を持って、再び自分自身の实力を知った事になったはずだ。

アビスは受付に行つて報告書を提出、そして報酬金を受け取った後に、自宅へと戻つていった。

そして、彼にとって決まっている事があり、狩猟から戻ったら必ず机に立てている兄の遺影とも言える写真と向かい合い、その日の事を話す事である。写真の隣には、兄が愛用していた遺品のボウガン、ブラックシュートが置かれている。黒い骨組みで作られ、軽量ながらも力強い弾丸を放つ優れ物だ。

「兄さん、俺今日なあ、あの怪鳥倒してきたんだ。飛び回られたり火い吐かれたりして大変だったんだけど、倒したらなんかこう……気分良くなんだよね。俺嘴と鱗くちばし持って帰ってきてさあ、なんかいい感じだったと思う」

椅子に座り、両肘を付きながら、アビスは今日の嬉しかった事、辛かった事を写真の中で敬礼を立てて映っている紫の髪と、凜々しい顔立ちの兄に向かって言った。

大抵の飛竜からは、その飛竜独特の素材を剥ぎ取る事が出来、その素材を金品に変えたり、素材を使って新たな武器や防具を作る事だって可能なのだ。ハンターはそれを求め、狩場に赴くと言っても

過言では無い。

今回の怪鳥も、あの大きな嘴は素材としては優秀なものであり、その素晴らしい強度がハンマーのヘッドとして扱われる事だってある。希少価値もなかなか高い部類に入るのだ。

鱗だって、飛竜の周囲を囲んでいるものではあるが、上手く剥ぎ取れば、その強度を自分の為に使う事だって出来る。ハンターは、飛竜を倒してそれで終わりという訳では無いのだ。

兄への報告が終わったアビスは、窓の前へと進み、空を眺める。大分暗くなり始めた空を見ていると、何故か兄を葬ったあの鋼風龍を思い出してしまう。

（確か村長、あれの事鋼風龍って言ってたけど……何モンなんだろ
うあいつ……。いつか俺も戦うのかなあ……）

この古龍は、アビスの兄、そして、その兄の部下であつた精鋭達を単独で全て倒してしまった。命を軽々と奪つてしまったその龍といつかは戦う事になるのかと想像すれば、軽々と恐怖が込み上げてくるものだ。

勿論、今の實力であれば、あの古龍に立ち向かうのは絶望的である。まさに、それは自殺行為に等しい。

明日は赤い皮を持つ凶暴な肉食モンスター、毒鳥竜の討伐の予定

が入っている。タイムマウスの沼に赴く為に、アビスはベッドの中で深い眠りについた。

第2章 英雄の弟（後書き）

2章目の投稿となります。現在はいくらかのテンポを置いて出来る限り他の作者様の作品も読みながら、今回投稿させて頂きました。

実はこれは私が過去に描いた作品でして、軽く手直しを加えた上でここに改めて投稿させて頂いたものです。別の投稿サイトでも投稿してたのですが、訂正版がこれと言う訳でもあります。

兎に角、今は他の方々の作品を読んで勉強する事と、自分で小説を描いて勉強する事をしてます。

第3章 猛毒の湿地（前書き）

アビスはバインドファングに強化した後、夜遅くに予定していた通り、沼地へ行き、毒鳥竜の狩猟に向かったのだった。

第3章 猛毒の湿地

アビスは昨日、予定をしていた通り、毒鳥竜を狩る為にカウンタ―で手続きを済ませようとしたのだが、1つ、ふとした事に気付く。

数日前に何度か翠牙竜^{すいがりゆう}、そして、そのリーダー格の大型の固体を狩猟していたのだ。翠色の鱗を持ち、2本足で歩きながら獲物に対して集団で容赦無く襲い掛かる小型ながらも危険な肉食のモンスターだ。

その牙から分泌される麻痺毒は恐ろしく、下手に噛み付かれ、体内に毒が回れば忽ち動きを封じられてしまう。しかし、その牙自体が武器を作る上で有効な素材になる事にもなるのだ。

牙だけでは無く、麻痺毒を体内から牙へと伝達する麻痺袋さえも溜められており、それを使う事でより強力な麻痺毒を扱う事も出来るだろう。

そして、砂泳竜^{さえいりゆう}と呼ばれる、砂の中を優雅に泳ぎ回る魚に後ろ足と鰭《ヒレ》を備え付けたようなモンスターから手に入れた鋭い鰭《ヒレ》も素材として自宅に在った為、それらの素材を使い、自分の愛用の剣を強化しようと考えたのだ。

その素材を、自分の愛用の片手剣 サーペントブレイド と一緒に工房へと持ち込み、そして刀身の役割を果たす牙の部分が更に鋭く、そして、麻痺毒も追加された上位武器 バインドフアング に強化する為、早速工房の婆さんに依頼をした。

「あんたかい？ この調子だと、完成するのに夜までかかるかもしれんよ。それでも大丈夫なのかい？」

サーペントブレイドといくつかの素材を受け取った緑色の服を着た婆さんは、素材と武器を見渡しながらかかるであろう時間を見積もった。小柄とは言っても、アビスと比較するとその差は激しく、まるで幼児を思わせるような体型をしているのがその婆さんなのだ。

だが、工房の技術だけは人間を遥かに超越しており、そして、鍛える為の体力も腕力も常人を遥かに凌ぐ。

「勿論だよ。 って言うか時間がかかるもんだろ？ 鍛えるのって」

アビスは武器の小難しさはある程度は理解しているからか、まだ武器を纏っていないその青いジャケットを着た姿で、ズボンのポケットに手を入れながら笑顔で対応した。

時間が余ったアビスは、これから戦う毒鳥竜ドクトリウの生態書を自宅で読み、戦闘の為の対策や、相手の攻撃手段をよく読んでいた。

その毒鳥竜は毒々しい赤の鱗に包まれた2本足で行動する鳥竜である。捕食する獲物に向かって、口から毒を吐き、ゆっくりと獲物を弱らせた上で食す、なかなか狡猾なモンスターである。

そのモンスターの長《おさ》は、体格は勿論の事であるが、紫色のまるで刃を思わせるような鶏冠とさかを備えており、そしてその吐き出す毒の濃度も子分と比較すると格段に増している。

下手をすれば、それだけで毒死するハンターだっているのだ。

気が付けば、既に夜になっており、アビスはすぐに工房へと足を運ぶ。既に防具を纏っており、いつでも狩場には赴ける状態だ。

工房で手渡されたのは、黄色い鱗に包まれた牙が刀身の役目を負った片手剣 バインドフアング である。完成し立てであったから、まだ微熱が残っていたが、アビスはこれを持ち上げるなり、1つの喜びが込み上げてくるのを覚えた。

「これって、えっと……確かバインドフアング、だっけ？」

持ち上げたはいいが、名称を忘れかけていた為、婆さんの前でその確認を取った。

「そうじゃよ。これを受けた相手は身体が痺れるんじゃよ」

穏やかな表情ではあるものの、婆さんの説明は、狩猟の世界では相当残酷なものがあるだろう。麻痺してしまえば、動けなくなっている間に他のモンスターに襲われたり、逆にハンターに攻撃のチャ

ンスとして狙われてしまう可能性があるのだから、決して無視出来ない要素だ。

「分かったよ、ありがとな婆さん！　じゃあ俺はもう行くから！」

辺りが暗くなっていたから、アビスはそろそろ急がなければいけないと感じ、婆さんに手を振りながらカウンターへと走っていった。

そのタインマウスの沼は、ドルンの村に近い場所に位置している為、馬車で行けばそんなに時間はかからなかった。

しかし、夜の沼地は恐怖で埋め尽くされていると言っても過言では無い地帯である。

ようやくアビスはタインマウスの沼に到着し、支給された地図や傷薬を持ち、夜の沼地の奥へと進んでいく。

湿地帯であるから、空気は湿っており、心地良いとは思えない空間でありながら、更には道の傍らでは紫色の液体が気泡を水中から弾かせながら待ち構えていた。

その濃い色が非常に毒々しい印象を与えるが、実際に毒が含まれている為、人間は侵入してはいけない場所である。入れば、身体を蝕まれてしまうのだ。

「ここにいて言うてたよなあ……。確か毒鳥竜どくちようりゅうだっけなあ……。どこいんだろっ……」

アビスは、モンスターの姿が見えないその地を、武器を背負ったままの状態で駆け足で進んでいった。

ハンターは、その狩場で採取する事の出来る植物等の素材を集める事がある。単にその素材が珍しいという理由で集める者もいるが、基本的に別の素材と調合し、狩場での行動に有益な道具を作る目的もあるのだ。

例えば、薬を作る事が出来れば、何か自分の身体に異変が起きた時に、それを助ける事が出来る。

毒キノコを採取しながら、アビスはどんどん奥へと歩いていくが、道中で何故か違和感を覚え始めていく。

随分と進んだというのに、モンスターの姿が一向に映らないのだ。普段ならば、草食のモンスターが静かに草を食べていたりしているというのに、今はその姿は無い。

無論、他のハンターを意図的に襲ってくるモンスターの姿も無かった。

姿が見えないとなれば、アビスも緊張感を保つ事が出来ない。気分を緩めながら歩き続けるが、そこに、1つの足音が地に響く。アビスの緊張感は、すぐに復活する。

「あれ？ まさかこれって、あいつ？」

アビスは本当に毒鳥竜の長が現れるのでは無いかと思い、すぐに背中からバインドフアングを取り、構えた。

しかし、現れたのは、長と呼ぶにはやや小さい、それでも一般的な人間の身長と並ぶサイズの毒鳥竜である。

「あ、良かった……デカいのじゃなくて」

一瞬安堵の表情を浮かべるが、敵である事に代わりの無い相手に向かって、片手剣の先端を向けた。

その1匹に続くかのように、何匹かの毒鳥竜が現れ、そして本能のように、アビスへと襲い掛かる。

アビスだって黙っているはずが無く、向かってくるモンスターに対してバインドフアングを振り下ろし、そして狙われたと気付けば、すぐに行動に入り、回避する。

その途中、遠方の茂みが揺れるのをアビスは感じ取った。

「あれ？ あれってなんだよ……まさか、ホントにあいつ！？」

手を止める余裕は無いが、驚く余裕はあったらしい。一応手は抜いていないものの、それでも毒鳥竜達はまだ2頭しか倒せていないのだ。

現れたのは、大きな体躯を持った毒鳥竜だ。

赤く毒々しい鱗はそのままに、頭部には例の紫色に染まった鶏冠が備わっている。まさに、長と呼ぶに相応しい姿、体格を誇っている。

しかし、アビスはと言うと。

（あれ……あんなにデカかったっけ？）

毒鳥竜の長の体格は、せいぜい子分の固体の1・5倍程度と生態書では見ていたアビスではあるが、今回出会った毒鳥竜の長は、そ

れを平然と超えており、以前戦った怪鳥と同等の身長を誇っているのだ。

つまり、子分の2倍は平気で越えるサイズだったのだ。

サイズだけを見れば、それはまさに子分を統治する主に相応しい。

きつとその長は、部下達の未熟な攻撃手段に怒りを覚えたからか、自分のライン上にいる子分達を無理矢理どかしながら、真つ直ぐとアビスに向かっていく。

アビスも空気が変わった事を察知し、攻撃の相手をすぐに切り替える。

だが、長の攻撃は非常に激しく、噛み付く為に振り落とされる頭部は、まるで巨大なハンマーを連想させ、そして飛び掛り行為は岩石の落下を連想させる。

決して戦闘経験が豊富とも言えないアビスにとっては、苦痛の一言だ。それに、子分達もまだ全員を倒せている訳では無いのだ。

それだけでは無く、アビスは自分の剣、バインドフアングを酷使し過ぎた為に、刀身である牙の部分が欠け始めていた。こうなってしまうえば、相手に傷をつけるのが非常に難しくなってしまう。だからこそ、支給されている砥石といしを使わなければいけない。

しかし、こんな敵だらけの場所で使うのは無理だ。研いでいる最中に噛み付かれるのがオチである。まずは逃げる事が先決だ。

目の前に映る林に飛び込み、毒鳥竜達の目を欺いた。あざむく

木々の茂る空間であれば、毒鳥竜達も上手く進めなくなる上に、身軽な人間であるアビスならば、どんどん奥へと逃げ込む事が出来るのだ。毒鳥竜達が足を取られている間に、アビスは逃げていく。

やがて、平地に辿り着き、灰色の胴体を持った4本足の草食竜のいる場所へと辿り着く。そこでは、ゆつくりと草を食している草食竜が映っているが、アビスを敵として見ていないから、アビスも落ち着いている事が出来る。

そして、そこでアビスは砥石を取り出し、バインドフアングの牙を1つ1つ丁寧に研ぎ始める。

するとそこに、何かが現れる。

「俺の獲物をどうするつもりだ？」

突然アビスは誰もいないはずの背後から声をかけられ、そしてその友好的では無い態度のそれを聞くと同時に振り向いた。

「獲物？ それってあのどくちょう……！」

事情が分からず、振り向くアビスであるが、目の前に映ったのは、ボウガンの銃口である。顔面に向けられるその脅威に、アビスは思わず声が出なくなるのを覚える。

ボウガンは殻で作られた弾丸を飛ばす仕組みであるが、火薬の力で発砲する為、その破壊力は折り紙付きだ。もしそれを人間が受ければ、防具ごと破壊されてもおかしくない威力である。

元々飛竜の強靱な鱗や甲殻を持ったモンスターを殺傷する為に生み出された兵器であるから、人間が狙われればもうそれは凶器の一言だ。

「毒鳥竜だあ？ 何惚^{とほ}けてやがんだよ？ さっき俺が狙ってた標的と戦ってたから今砥石使ってんだろ？」

ボウガンの銃口を向け続けているその赤い鎧の男は、まるでアビスに自分の獲物を取られたかのような物言いでアビスを脅し続けている。

「標的って……何の事だよ？ あんたが言ってる標的って誰だよ？」

アビスは呼吸を整えながら、緊張を押し止めて聞き出そうとする。何か勘違いされているのかもしれないし、下手をすれば本当に殺さ

れてしまうから、ここは凄く慎重に行くべきだ。

「毒煙鳥どくえんちようの事だ。お前あそこから来ただろ。だつたらあいつん事狙つてたつて事じゃねえか。飛んでるとこ見たはずだぜ」

アビスにとっては男の言い分があまり理解出来なかったが、とりあえず1つだけ分かった事は、この男の獲物に手を出したと勘違いをされている事である。しかし、銃口は未だに向けられたままである。

「そう言えば確かに空は……なんか飛んでたけど……」

アビスは毒鳥竜との戦いがあつたから、あまり意識はしていなかっただろう。だが、それでも何かが飛んでいたのは一応見ていたらしい。ただ、深く心に残していなかったただけだったようだ。

「なんだ、やっぱ知ってんじゃないかよお前」

それでも男は銃口を逸らす事をせず、アビスを攻め立て続ける。

「でもあれは俺の上通つてただけだぞ？ 俺その毒煙鳥つて奴と戦つてないぞ？」

それは事実であり、そしてここで絶対に言わなければいけない事だ。アビスは見た時の状況をそのまま説明する。

「証拠あんのか？ 見せろや」

アビスを疑い続けるその男は、まるでアビスを追い詰めているようにも見えた。

「証拠って言われても……、でも俺やってないのは事実なんだって！」

自分は事実しか言っていないのに、それを受け入れてくれない男に多少苛立ったものの、それでも相手が怖いから本気では抵抗する事が出来ないアビスであった。

しかし、男はそれで許してくれなかった。銃口を僅かにアビスの顔面から逸らし、そして銃弾を発射させたのだ。

飛ばされた銃弾はアビスの横を通り過ぎ、そしてアビスの背後にある木々の中に入って消えていく。

（こいつ……本気か……）

遂に発砲された為、アビスの緊張感も更に上昇する。恐怖と言う形で、全身に震えが走るのを覚える。

「おいおい、人のもん奪つといて逆ギレかい？」

どうやらこの男はまだアビスを疑っているらしい。次、発砲した

時はきつとアビスの最期になってしまいかもしれない。

しかし、アビスはまだハンターになって間もないのだ。こんなつまらない話で命を落とす訳にはいかないだろう。どうせ死ぬなら、飛竜との戦いで死にたいとでも考えているのだろうが、死なない方が良いのは言うまでも無い。

だが、今の状況は厳しかった。

「いい事教えてやる。お前以外にも俺の獲物狙ったアホがくっさる程いてなあ、そいつらもお前と同じで逆ギレしやがったから、あの世に送ってやったぜ。お前もどうせ反省してねだろうし、あいつらんとこ送ってやるよ」

一体男は何者なのだろうか。と考えている余裕はアビスには無かった。再び銃口がアビスの顔面へと向けられ、本当に絶望的な状態になってしまっている。

(!!)

もう、アビスは言葉すら出ない。本当にここで終わってしまうのか、それしか考える事が出来なかった。

「死ね」

それで全てが決まると思ったその時だ。

さっきまでアビスを狙っていた毒鳥竜達が茂みから一斉に現れたのだ。随分と時間をかけていたようであるが、このまま黙っていればあっさりと餌食になってしまう。

（今だ！）

アビスは毒鳥竜達に囲まれた隙を狙い、そして、男の気が毒鳥竜達に向けられたタイミングを逃さず、ボウガンで弾く。

逃げる為の隙を作ったアビスは、すぐにその場から逃げ出した。

「あ！　くそ！　待てや糞ガキがあー！」

逃げられたアビスに対して取り乱すかのように、男は理性も失ったような怒りを撒き散らす。相当怒りっぽい性格であるらしい。しかし、そうしている間にも毒鳥竜に狙われた為、男もすぐにその場から逃げ出した。

遠距離には好都合であるボウガンも、近距離では非常に相性が悪い。だから、男も逃げる選択肢を選んだ訳であるが、逃げる方向はアビスとは別の場所だ。

「まあいいや、あんだだけの量ならあいつもただじゃ済まねえだろうし、そんなま死ねや糞ガキが」

男はボウガンを背負うと、毒鳥竜達の視界に入らないよう、岩陰を通り、そして毒煙鳥の場所へと急いで走っていく。

アビスはとりあえずは自分を殺そうとしてきたボウガン使いの赤い鎧の男から逃げ切れた為、1つ安堵の息を漏らす、まだ毒鳥竜が残っているのだ。ある意味、あの男から助けてくれたとは言え、敵である事には変わりはない。

そして、もうアビスの武器であるバインドフングは、斬れ味を取り戻している為、戦うには充分である。

向かってくる毒鳥竜達を斬り付け、そして麻痺毒を注入させる事によってその動きを麻痺させる。そして、足止めを食らっている隙を付き、今度は親分であるあの長に斬りかかる。

攻撃をする際に必ずモンスターは反動を加える為に身体に力を込める。それこそが、人間に対して隙を生み出す事にもなる。それにこのモンスター達は基本的に正面しか狙えず、左右を狙う程身体が柔軟では無い為、尚更好都合である。

時折毒も吐かれるが、それもアビスはしっかりと避けている。

もし直撃すればその毒が体内に回り、立っている事すら厳しくなってしまうはずだ。しかし、当たらなければ大丈夫である。

紫色のその塊は、正面にしか吐かれないのだから、正面に立たなければ良いのだ。

毒鳥竜の長は徐々に傷を付けられ、麻痺毒もやがて全身に伝わっていく。そして、遂にその巨体の毒鳥竜が痺れによって動かなくなる。同時に、頭部が垂れ下がり、その時こそ、アビスにとっては一番のチャンスとなったのだ。

「よっしゃ、今だ!!」

身長差の影響で今までは頭部に攻撃出来なかったアビスだが、今ならば攻撃が出来る、懇親の力を込めて頭部目掛けてバインドフアングを振り落とす。

毒鳥竜の頭部からは激しく血が噴き出され、その巨大な長は僅かな呻き声を上げ、地面へと崩れ落ちた。

しかし、まだ戦いは終わっていない。残りの子分がいるのだから、まだ気は抜けないが、長《おさ》を倒したアビスにとって、子分との戦いはそこまで苦痛にはならないはずだ。彼の手際は非常に良いものがあった。

やがて、子分達も殲滅させアビスは剥ぎ取る為の小型ナイフを取り出した。

長からは皮を剥ぎ取った。飛竜とは異なり、甲殻おひが無い為、切り離すのはいくらかは容易であつた。

一方、子分の毒鳥竜からも、皮と鱗を剥ぎ取った。逆に毒の牙を剥ぎ取る事はしなかった。毒腺どくせんと繋がっている為、下手に切り離して毒でも自分に付着してしまえば困る事になる。だから、牙の方は諦めている。

因みに、以前集めた翠牙竜の牙は、回収班がモンスターの死体を回収した際に、ハンター自身が剥ぎ取った素材とは別に、報酬として新たな素材を手渡すのだが、その時に牙を手に入れていた。

だから、今回もその手で行こうとアビスは考えたのだ。

しかし、帰りの馬車の荷台の中で、アビスはあの男の事が頭から切り離す事が出来なかった。

なぜ、自分を殺そうとしてきたのか、そして、その背景には、多くのハンターが犠牲になっている恐ろしい事実もあるという事があり、徐々に寒気が走ってくる。しかし、今考えた所で、その答が出てくる事は無いだろう。

第3章 猛毒の湿地（後書き）

お久しぶりです。最近多忙や諸事情によつて、投稿が遅れてましたが、ここで新作を投稿する事が出来ました。

今はなかなか他の方々の作品も読めない状況ではありますが、何とか時間を見つけて皆さんの作品も読んでいきたいと考えてます。

数ヶ月ぶりの新作投稿ですが、これからも宜しくお願い致します。

第4章 紅蓮の虐殺者（前書き）

狙った標的は決して逃さず、
そして邪魔する別のハンターを
その場で始末する冷酷無慈悲の
ハンターの沼地での記録。

第4章 紅蓮の虐殺者

とあるハンターが、タインマウスの沼で検索おこなを行っている。

全身を赤殻せつかくかい蟹と呼ばれる巨大な甲殻種のモンスターの素材で作り上げた防具で身を固めている。

ヘルムは顔面部分は白く作られており、目の部分だけが外を見る事が出来るように刳り貫かれている。口の辺りは縦線の穴がいくつも空いており、そのあるハンターの恐ろしさが現れていた。

背中にはブレイジングハートと呼ばれる、赤い鱗と翼で固められた火竜製のボウガンが背負われている。

そのハンターの名を『ノーザン』と言う。

その性格は非常に残忍で冷酷であり、自分の利益の為に他のハンターの命を軽々と奪う。彼が所持しているブレイジングハートと呼ばれるボウガンも、確かに上質な鱗と硬質な甲殻から作られたものであるが、彼自身がつけたものではない。

別のハンターから重量のあるハンマーを使い、殺した相手から強

奪した盗品なのだ。ハンマーを選択した理由は、武器の特性に惹かれたからでは無い。ボウガンが強奪する際に、その威力と脅迫する為の迫力に目が行ったからである。実際は殺したから、脅迫どころの騒ぎでは無いが。

本来は遠距離武器と近距離武器によって武具の作りが区別されるのだが、遠距離用の武器を手に入れる為であつたから、彼は近距離用の武具を揃える事はしなかつた。

彼が今日狙っていた獲物は、毒煙鳥である。

毒を体内に持った灰色のゴム質の皮を持ち、そしてその鶏の様な体軀から、毒を吐き出し敵対者を弱らせる。自身は臆病な性格である為、相手が弱つた隙を突いて逃げるのだが、相手を弱らせる為に、自身もまた凶暴化するのだ。

更に、頭部に備えられている鶏冠を光らせる事によって、相手の視界を短時間奪う事も出来る。

そして、ノーザンには仲間が存在しない。いや、近寄ってもらえないと書いた方が正しいかもしれない。そして、出来たとしてもすぐにその仲間は消えてしまうのだ。

基本的には彼自身が相手の方に仲間として装い、そして、自分に何か危険が迫つたりした場合、その相手を犠牲にしていつも自分だけが助かっていたのだ。モンスターの討伐に限定した事では無い。

自分の所持金が不足した場合や、その時必要としている材料が不足している場合は至る街や村にうろつき、適当にハンターを捕まえる。そして、金品を脅し取り、ノーザンの気分によっては撃ち殺す事も珍しくない。

また、多くの場合女性のハンターを狙っており、プライドの見えない性格も見え隠れしている。

通常ならば、殺人、強盗を犯せばハンターのほぼ全てを取り仕切っているギルドナイトによって逮捕され、法廷何かしらの判決を受け、収容所に入れられるか、或いは死刑か、それともその他の重刑が科せられる。

しかし、ノーザンは意外にもギルドナイトの目を盗むのが上手く、尚且つ通常ハンターというのは元々武器を背負いながら街中を歩くのが当たり前であるから、ギルドナイトであってもその武具で包まれた姿を見ただけで殺人犯かどうかを見通すのは不可能に近い。

実際、ノーザンと同じ装備をしているハンターはこの世界には数え切れない数が存在する。武具の種類は確かに豊富ではあるが、ハンターの数に比べればあまりにも少ないのだ。

そして、実際に指名手配をするとなれば、ヘルムの無い素顔を映さなければならぬ。だから、事実上ノーザンもギルドナイト達からとって見れば、普通のハンターなのだ。

彼は今、ボウガンを構えながら目的の鳥竜である毒煙鳥を探して

いる。

ノーザンに近寄る小型の肉食モンスター達は彼の正確な射撃により、どんどん撃ち殺されていく。しかし、彼は倒したモンスターから素材を剥ぎ取るうとはしなかった。彼にとつては素材等、他の自分より弱いハンターを脅迫すれば好きなだけ得られると思っている。

今までずっとそうしてきたのだから、もう習慣となっている。

彼が今回狙うのは、一般的なハンターであれば持っている可能性すら疑わしい、そんな珍しい素材だ。

その毒煙鳥の頭は、ハンマーのヘッド部分等に利用されたり、また、愛好家によって頭部分を防腐剤を使って保存されたりと、なかなか希少価値の高い素材であるが、頭部を傷つけてしまえばその価値は無くなってしまう。

だからこそ、ノーザンは決して頭部を傷つけぬよう、徐々に毒煙鳥をボウガンで弱らせていく。

毒煙鳥は比較的大きなサイズを誇る怪鳥である。茂みの中にいたとしても、状態が大きく曝け出されている以上は他のハンターに簡単に発見されてしまう。ノーザンはすぐに、今日の獲物を見つけ出した。

「いたか俺の獲物ちゃんよお。今俺が滅茶苦茶にしてやつから待つてろよお」

ノーザンは白い仮面のヘルムの裏で、不気味な笑みを浮かべ、そしてブレイジングハートと呼ばれるボウガンを構える。彼は現在、ボウガンの発砲によって毒煙鳥の全身が穴だらけになり、そして血が流れている所を想像していたのだ。

最初は至って普通の通常弾で攻撃を加えていく。毒煙鳥がノーザンに気付く前に、最初の1発が紫色に染まった翼膜に命中する。

自分に攻撃を加えてきたハンターの存在を知った毒煙鳥は、鶏トリのような鳴き声を天に向かって放った後、一直線にノーザンへと接近していく。

「おいおいデケえだけで俺に勝てっと思ってんじゃねえぞ？」

ノーザンは再び銃弾を放つ。毒煙鳥のやや強度の弱い腹部へと命中するが、やはりゴム質で出来ているその皮膚はいくらかの弾丸を防いでしまう。

しかし、毒煙鳥も対抗しなければと、突然鶏冠を打ち鳴らす。バチバチと火花が散り、そして辺り一面が非常に眩しい光に包まれる。

「ぐあっ！！ あんにやろう小細工しやがったなあ！」

視界を短時間だけであるものの、奪われてしまったのだから、ノーザンは怒りを見せる。

鶏冠を破壊すれば、発行源を断ち切る事になるから、あの日会を放つ事が出来なくなる。しかし、下手に頭部を狙えば傷を付けてしまい、価値が無くなってしまう。

通常弾を胴体に向けて何度か発射し、ゴムで作られた皮膚を破つていく。開いた傷口を狙い、鋭さのある貫通弾や、着弾時に爆発する徹甲榴弾を送り込んでいく。連続で攻撃を受ければそのゴム質の鎧も破壊されてしまうのだ。

攻撃を受け続けたゲリヨスは、一度撤退する為にその場から飛び立った。それはまるで最期の力を振り絞るかのようだった。

「逃げたか……臆病もんが……。逃げられっと思ってんじゃねえぞ
こん糞怪鳥があ」

光を受けた怒りをまだ抑える事が出来なかったノーザンは、飛び立つ姿を見上げながら睨みつけた。勿論、彼は空中から逃げていくゲリヨスを追いかける。

崖に挟まれた道を進み、広い林に出る。そこにいたのは、先程までの巨体の傷だらけの毒煙鳥では無い。別のハンターだったのだ。

そのハンターは現在、砥石で武器を研いでいる。

ノーザンはそのハンターにボウガンの銃口を向け、迫った。

「俺の獲物をどうするつもりだ？」

突然ノーザンに銃口を向けられたハンターの少年は振り向いて言った。

「獲物？ それってあのどくちよう……！」

しかし、そこで少年の声が止まった。銃口を向けられていれば、それも無理は無いのかもしれない。ボウガンは人間の命を簡単に奪える凶器なのだから、黙っているという方が無理だ。

あの強靱な鱗や甲殻を打ち破る為の火薬製の兵器であるのだから、人間が食らえば一巻の終わりである。

「毒鳥竜どくちゅうりゅうだあ？ 何惚とぼけてやがんだよ？ さっき俺が狙ってた標的と戦ってたから今砥石使ってたんだろ？」

毒煙鳥どくえんちようが飛んでいった方向にはこの少年がいたのだから、きつと毒煙鳥と戦い、そしてその結果として劣化した剣を研いでいたと考え、そして疑ったのだ。

「標的って……何の事だよ？ あんたが言ってる標的って誰だよ？」

少年は必死な思いで否定をしている。

「毒煙鳥どくえんちようの事だ。お前あそこから来ただろ。だつたらあいつん事狙ってたって事じゃねえか。飛んできるとこ見たはずだぜ」

ノーザンは未だに銃口を少年の顔面に向けたまま、疑い続ける。

「そう言えば確かに空は……なんか飛んでたけど……」

少年は少し前の事を思い出すなり、そう言い返した。

「なんだ、やっぱ知ってんじゃねえかよお前」

それでもノーザンは銃口を逸らす事をせず、少年を攻め立て続ける。

「でもあれは俺の上通ってっただけだぞ？ 俺その毒煙鳥って奴と戦ってないぞ？」

それは事実なのだろうか、少年は怖いからか、やや弱々しく答えているが、その発言に嘘が含まれているとはあまり考えられない。

「証拠あんのか？ 見せろや」

少年を疑い続けるノーザンの態度は、まるで少年を追い詰めているようにも見えた。

「証拠って言われても……、でも俺やってないのは事実なんだって！」

自分は事実しか言っていないのに、それを受け入れてくれない男に多少苛立ったものの、それでも相手が怖いから本気では抵抗する事が出来ない少年であった。

しかし、ノーザンはそれで許してくれなかった。銃口を僅かに少年の顔面から逸らし、そして銃弾を発射させたのだ。

飛ばされた銃弾は少年の横を通り過ぎ、そして少年の背後にある木々の中に入って消えていく。

「おいおい、人のもん奪つといて逆ギレかい？」

自分の獲物を奪ったであろう少年に対し、改めてリロードをし直した武器を向け、更に迫る。少年を見下しながら言ったノーザンは、更に少年に言う。

「いい事教えてやる。お前以外にも俺の獲物狙ったアホがくっさる

程いてなあ、そいつらもお前と同じで逆ギレしやがったから、あの世に送ってやったぜ。お前もどうせ反省してねんだろっし、あいつらんとこ送ってやるよ」

ノーザンは自分の行いをまるで反省しようとしないう少年に対し、再度銃口を向け、そして、再び最終的な決断を判定したかのような台詞を出した。

「死ね」

引き金に手を伸ばしたまさにその時である。

茂みから現れたのは、紫色の鶏冠が印象的な大型の毒鳥竜と、その子分達だったのだ。その毒鳥竜達が現れた隙を突かれ、少年に逃げられてしまう。

「あ！　くそ！　待てや糞ガキがあ！！」

獲物を奪おうとしていた少年を逃してしまい、怒鳴りながら少年を追いかけようとするが、現れた毒鳥竜の大群のせいで思い通りに事が進まなくなってしまった。

結果、少年の始末に失敗し、結局は自分も逃げる破目になってしまふ。

「まあいいや、あんだけの量ならあいつもただじゃ済まねえだろうし、そんなま死ねや糞ガキが」

毒鳥竜の大群から何とか抜け出したノーザンは、背後にいる毒鳥竜の群れの中にいると思われる少年に言い残し、そしてノーザンは毒煙鳥を再び追った。

「ちょい時間かけ過ぎか……」

ノーザンは独り言を呟きながら、タイムマウスの沼を駆け足で進んでいく。実は、ノーザンはあの少年が毒煙鳥を狙っていたいなかった事は知っていた。しかし、自分より弱い者を狙うのが趣味であり、そして生業なりわいでもあるから、口実にする元となるものは何でも良かったのだ。

適当に相手が悪者となるように言いがかりを付け、そしてノーザンの気分次第で相手を抹殺する。しかし、今回はあまりにも相手を追い詰める為に時間を使いすぎた為にそれが仇となり、予想外の邪魔によって相手に逃げられてしまう。

「やっぱ気に食わん奴はとっとと殺すべきだったぜ……」

再び独り言を呟いた。

そして、誰かの酄いひきを道中で聞き取った。

「なんだ？」

ノーザンは他人から奪ったボウガン、ブレイジングハートを構え、辺りを見渡す。そこにいたのは、先程自分が狙っていた毒煙鳥だ。消耗した体力を復活させる為に、睡眠を取っていた。

1つの噂として、飛竜や鳥竜は身体に傷がついても、睡眠によって自然治癒力を高め、傷口を塞いでしまうと言う。このまま放置しておけば、今までのノーザンの攻撃も無駄になってしまう。

しかし、ここで発見されたのは不運である。

「なんだここにいやがったのかあ。まあいいや、どうせてめえはここで死ぬんだし、悪く思うんじゃないぞ？」

ノーザンは爆発性のある徹甲榴弾を装填し、寝ているゲリヨスの腹部に照準を合わせる。

「くたばれや糞怪鳥めが」

冷たい一言と同時に、発射された。

徹甲榴弾の爆発が決め手となり、毒煙鳥は仕留められた。周囲に血が散らばる中、ノーザンは毒煙鳥の頭を慎重に切り取った。希少価値の高い素材として知られているその頭部は、一部の強力な武器の素材にすらなる程である。

「さて、帰つかあ」

そして、ノーザンはタインマウスの沼を去った。

毒煙鳥を倒したノーザンは、街へと戻るが、戦いによって多くの弾を消費してしまった。当然補充をしなければいけないが、店で買う、素材と素材を調合して作るといった手間を取る事はしない。

同じボウガン使いのハンターを見つけ出し、そして人目の付かない場所へと連れ込み、弾を奪い取る。銃口さえ向ければ、簡単に相手は震え上がる。

「さて、次は誰狙おうかねえ」

弾を奪われた男性のハンターを背後に、ノーザンはボウガンを右肩に乗せながら街をブラブラするのだった。

第4章 紅蓮の虐殺者（後書き）

最近多忙で、長い間投稿が出来ませんでした。期待されてた方々には多大な迷惑をおかけした事をお詫び申し上げます。

第5章 深緑竜の巣穴（前書き）

ドルンの村の辺境にある深緑竜の巣穴に入った2人のハンターが戻ってこない、アビスに連絡が入る。

強引に任務を渡されてしまったアビスは、すぐに武器を取り、内部へと入っていく。連絡を渡してきたロジャーと呼ばれるハンターと共に。

第5章 深緑竜の巣穴

「どこなんだよ、その深緑竜しんりょくりゅうの巣すって」

アビスは今、アルトガの密林を歩き回っている。数時間前、アビスが今歩いている密林でアビスを除く3人のハンターが深緑竜の討伐おこなを行っており、そして、そのメンバーの2人が深緑竜が留守にしていた巣に忍び込み、卵を奪おうとしていたのだ。

アビスに現状を伝えにやって来た1人のハンターは奪取を止めようとしたが、2人は耳を貸さなかったらしい。

そして、卵の重さに手間取っている間に巣の持ち主が戻ってきてしまい、予測されていた通り、深緑竜は我が子の命が簞だつた卵を狙われていた事に対して怒りを覚え、3人は地獄を見る事となったのだ。

結果的に上手く逃げ切ったのは、この1人だけである。

「もうすぐです。あの洞穴の先に深緑竜の巣があります。あの2人の事だから……多分生きてると思いますけど……」

案内役のハンターの表情が暗くなる。鉱石で作られた武具を纏っているが、やはり表情は暗い。

仲間が過酷な状況下で生き延びていられるのか、それを不安に思っているのだ。

「んじゃあとりあえず巢に行つて、戦うつて事だな？ あ、そうだ、一応名前教えてよ。君の名前と、その2人の名前」

アビスはまだ名前を案内役のハンターから聞いていなかった為、それを訊ねる。

「うつかりしてました。僕はロジャー、そしてあの2人はジンとガロトつて言います」

ロジャーは、仲間の名前もアビスに教えた。

「ロジャーだね、分かったよ。んで巢はもうすぐ？」

名前を知ったアビスは、今度は巢まで到着するのにどれだけ時間がかかるか、そこについて訊ねる。

「あそこです。あそここの穴から巢に行けます」

ロジャーは、目の前に見えた空に指を差す。きっとそこに、深緑竜と、ロジャーの仲間がいるのだ。

「結構奥騒がしくないか？」

アビスの徐々に近づいていく巢穴の奥から、巨体が地面を踏み鳴らしているような音と、武器と甲殻がぶつかり合うような音を聞き

取り、ロジャーにそれを聞いた。

「あの2人がまだ生きてる証拠ですよ。早く行かないと！」

2人はそのまま深緑竜の巣穴へと入っていく。

深緑竜の巣の内部では、例の2人のハンターが抵抗を続けていた。

「うわっ！ こっち来んなあ！！」

紅い鱗で作られた武具を纏ったハンターが、目の前から走り寄ってくる緑色の体躯と大きな翼を持った飛竜を眼中に入れながら叫んだ。

「バカ！ ジン早く正面から外れろ！ 何してんだ！」

青い甲殻で作られた武具を纏っているハンターが、ジンと呼ばれる紅い装備のハンターに向かって叫ぶ。

この深緑竜は、ハンターに対して猛烈な突進を仕掛けてくる事が多い。しかし、その大きな身体を左右に制御するのは難しい為に、方向修正が上手く出来なくなってしまう。

その為、確かに正面からずれてしまえば即座に回避は出来るのだが、ジンは適切な回避手段を取らない為に、その深緑竜に弾き飛ばされてしまう。

ジンの扱っている武器は太刀であり、それでも飛竜の甲殻を叩き斬る為にそれなりの大型サイズで作られている。

深緑竜の動きも確認せずに攻撃を仕掛ける為、太刀の動きに振り回されている間に反撃されてしまうケースが多かった。鎧に加え、受け流し自体はしているからある程度の防衛手段は取っているが、やはり吹き飛ばされている事に変わりはない。

「お前なあ……慣れてないくせにそんな使い辛い武器持って来るなよなあ」

きつとこのジンでは無い青い甲殻の装備の男はガロトなのだろう。

ガロトは立ち上がるジンに対してそう言った。

「おれはこれでも最終的にはちゃんと倒せてるんだからいいじゃん」
攻撃を受け続けているにも関わらず、ジンは結果さえ良ければ全てが良いと、言い返した。

「傷薬が無いと何も出来ないくせにな」

ジンの極めて悪い回避技術をいくらか補ってくれているのは、回復薬のおかげである。その薬品は飲み込むと身体の損傷箇所を瞬時に治癒する効果がある。

だからこそジンは討伐自体は毎回成功させているが、飛竜の攻撃を受け流す技術もなかなかのものであり、骨折等の大怪我も非常に上手く免れている。

*** **

「あれだな……。でもあんだけぶっ飛ばされててよくやるなあ……」

洞穴に入ったアビスとロジャーだが、アビスは深緑竜の伸びた尻尾で吹き飛ばされたジンの姿を見るなり、そう呟いた。

だが、そんなジンもすぐに立ち上がり、そして反撃をおこな行っている。

「急ぎましょう！ あのままほっといたらいくらジンでも危ないですよ！」

ロジャーはすぐに鉄製の片手剣を持ち、暴れている深緑竜を強く見続けた。戦わなければ、終わらないのだから。

「当たり前だろ！ あんな危なっかしい奴初めて見たぞ！」

正直、しっかりと回避すらしないハンターを見るのはアビスにとっては初めてだったのだ。そして、ロジャーと共に、深緑竜へと近

づいていった。

「ジン！ ガロト！ 遅くなってごめん！ 今頼れる人を連れてきました！」

深緑竜と対峙している2人のハンターは互いに声を掛け合いながら武器を振るっていたが、ロジャーの声を聞いて2人は振り向いた。

「ロジャー、随分遅かったなあ。こっちは馬鹿なジンのせいで色々振り回されてたつてのに」

ガロトは鉱石でヘッドを作っているハンマーを持ちながら、ロジャーへと言い返す。よほどジンと共に行動していたのが辛かったのだろう。

「そんな事無いですよ。ちゃんと急いでお連れしたつもりなんです……」

ロジャーはそう言い返すが、ガロトが時間を遅く感じるのも無理は無かっただろう。

大型のモンスターに襲われ、恐怖心と緊張感にも襲われている時は通常よりも時の流れは早く感じてしまうものである。アビス達が来るまでの間、幾度と無く深緑竜に攻撃され続けたであろう、そのジンの鎧には大小様々な傷が残っている。

勿論、ガロトの方が傷は少ない。

「じゃあロジャー、早く俺達も援護しようよ？ 多分もうすぐ倒せ
ると思うし」

アビスはロジャーに言いながら、バインドファングを取り出した。

目の前の深緑竜を倒す為ではあるが、彼らがどのように戦っていたのかは詳しくは分からないだろう。それでも、今は共に戦うしかないのだ。

「君は？」

初めてアビスの姿を見たガロトは、早速と言わんばかりに訊ねる。

「俺アビスってんだ。君達の援護頼まれたから来たんだよ。とりあ
えず宜しく」

アビスは自分の名前を伝え、そして、ここに来た経緯も簡単に説明する。一時的とはいえ、共に戦う仲間であるのだから、軽く笑顔を混ぜた。

「確か君ガロトって言ってたよな？ 頼れるかどうか分かんないけど、俺頑張るから、宜しく！」

自信が無くてもアビスはハンターであるから、必ず役に立つ場面を作りたい、そして見せたいという一心で、改めて挨拶を交わす。

「分かったよ。ちゃんと頼むぞ」

ガロトはハンマーを構えながら、深緑竜へと向かっていく。アビスもその後ろを追いかける。

深緑竜は尻尾を振り回し、そして時には空中で縦に1回転する攻撃さえも仕掛けてきたりする。その為、単独で狩猟が出来れば一人前と認められる程の飛竜なのだ。

しかし、炎の球を吐き出している最中は足元に対する注意が散漫になる。

口内から発射させるのだから、何かの反動でその炎が器官にでも引っかかったりでもすれば、喉元が焼かれ、自滅してしまう事も在り得る。だから、攻撃される側も、する側も非常に危険なのだ。

そして、飛竜は巨体であるが故に走り出した後にそのままバランスを崩し、転倒するケースが多く、その隙を突くのもハンターの大事な部分なのだ。

「ガロト！ まず尻尾狙おうよ！ あんな長いもん振り回されてたら危ないし、こっちも攻撃し難いからさあ」

アビスは深緑竜の伸びた尻尾を指差しながら、ガロトに作戦を投げかける。

「まあ、オレらもさつきから狙ってたんだけど……。まあいいや、じゃ、オレはあいつの注意引くから、頼むぞ」

ガロトは深緑竜の正面へと進み、火炎球の発射を誘う。深緑竜の背後にアビスが回る。

火炎球が発射されたその時を狙い、アビスは尻尾を斬り刻み、ガロトは深緑竜の脚部を目掛けてハンマーを横振りにする。脚に走った鈍痛により、深緑竜は転倒する。

そこに追い討ちをかける為に、アビスはバインドファンクに力を入れる。その結果として、深緑竜は尻尾を斬られたのだ。

「後ちよつとか？」

アビスは更に攻め込んだ。

緑色の鱗の内側に攻撃を受け続けていた深緑竜の動きが徐々に遅くなっている。全身に走る痛みに耐え切れず、身体を硬直させているのかもしれない。

おまけに現在は尻尾も斬り落とされている。蓄積された痛みは相応なものなのは間違いないだろう。

しかし、その時である。突然深緑竜の真上からジンが現れ、その太刀の刀身を真下に向けて降りたものであるから、着地と同時に見事なまでに深緑竜の首を貫通し、そのまま倒してしまったのだ。

「あれ？　もしかして、終わった？」

ジンの太刀が深緑竜の首を貫いた瞬間、深緑竜はそのまま地面に崩れ落ち、そのまま動かなくなった。

戸惑いながら、ジンは深く突き刺さった太刀を力を入れて引き抜いた。

「見事ですよ！　狩猟成功ですよ！」

完全に動かなくなった深緑竜を調べたロジャーは、討伐が成功した事をジン、そしてその他の皆に告げた。さっきまで打撃を受け続け、皆の足を引っ張っていたジンが最後の最後で決定打を下したのだ。

「皆が最初どう戦ってたか知らないけど、まあとりあえず結果オライでいいのかなあ？」

アビスは動かなくなった深緑竜を見ながら、両手を頭の後ろへと回した。

「……まあその通りかもな」

ジンもアビスの台詞を聞いて焦るような様子を見せながら、納得の表情を出した。あの3人の中で最も周囲をハラハラさせていたのはジンなのだ。

使った回復薬の量も、鎧に付いた傷の量も凄いものがある。どのようにして今までピンチを切り抜けてきたのか、アビスには理解出来なかった。

「アビスさん！ オレ達のピンチを助けてくれてありがとうございしました。なんと礼を言ったらいいか……」

ロジャーにとって、アビスの救いの手はたまらなく嬉しいものだっただろう。ロジャーは握手を求め、右手を伸ばした。

「別にそんな風に言わなくても……。俺だってまだ未熟だし、今回の戦いでまたなんか成長したような気もするしさあ」

アビスはこの救助を要請された事に対し、不満を抱く事は無かった。寧ろ、経験値を上げる為だと考えればこれもまた良い経験だっただろう。

「だけどさあ、俺だってあいつ狩るの手伝ったんだから、ちゃんと報酬はくれんだろうな？」

アビスだって折角苦労をしたのだから、それに似合うものが欲しいと、少しだけ人間らしい所を見せ付けた。

「別にいいけど、4人で分けるから分量は期待出来ないぞ？」

ガロトの言う通りである。4人で飛竜の素材を剥ぎ取れば、当然その素材の量も4分の1となる。だから、分量だけを考えれば利益は減るのは確実だ。

4人はそれぞれ素材を剥ぎ取り、そしてジンは大型の卵を持つ事を忘れずに皆はその巢を後にする。

3人よりちよつと遅れて深緑竜から離れるロジャーであったが、その時、深緑竜の顔面辺りで何か紅く光るものを見つけた。

それは、丸い宝石のようなものだった。

「ちよつと待つて下さい！　なんかこんなの見つかったんですけど……」

その丸く、紅い宝石を皆に見せ付ける。

しかし、誰一人としてその宝石に興味を見せる者は居なかった。結局その宝石のような塊はロジャーが貰う事となった。今の時点では、その宝石の意味を知る者は、誰もいなかった。

第5章 深緑竜の巣穴（後書き）

お久しぶりです。私生活の方で残業が多かった為、更新が遅れてしまいました。

現在は実質的には28章を執筆中でして、近々書き溜めた内容も更新していくつもりであります。これからも宜しくお願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6353t/>

Lucifer Crow

2011年10月10日11時27分発行